

鏡獅子に挑む

一度見たら強い印象が残る鮮やかな色使い。今にも動き出しそうな躍動感あふれる表情。歌舞伎の演目「春興鏡獅子」の一瞬を切り取ったこの彫刻は、平櫛田中が生み出した「鏡獅子」と呼ばれる作品です。小平と縁が深い田中が、「鏡獅子」に賭けた情熱に触れ、この作品の魅力に迫ります。



六代目尾上菊五郎(左)と平櫛田中(右)

田中に、歌舞伎役者六代目尾上菊五郎を作品にする話が届きます。この時、作品は「春興鏡獅子」しかない決めていた田中は、毎日劇場に通い、あらゆる場所から菊五郎を観察して「この瞬間しかない」という姿をとらえます。

日本の伝統彫刻の
手本となる大作を残す

昭和11年、田中64歳。人生を賭けた挑戦が始まりました。まず、歌舞伎の厚い衣装を形にするだけでは迫力ある姿を作ることができません。



裸姿で姿勢をとる菊五郎

裸姿の菊五郎を見て、筋肉の隆起や体のしなやかさを知ったことで、生きているかのような躍動的な表現を可能にしました。そして、「鏡獅子試作裸像」が完成します。姿勢を決めた瞬間と緊張感を切り取った作品です。この裸像をもとに制作されたのが、きらびやかな衣装をまとった「試作鏡獅子」です。



彫り方の指示を出す田中



完成した鏡獅子と田中

試作鏡獅子を2層の木彫に拡大したところ、絶妙なバランスが崩れてしまいました。像が大きくなったことで頭が小さく見え、頭を大きくすれば体のバランスが狂う。1箇所を直せば別の箇所が狂ってしまう、部分的な修正では解決できない問題にぶつかります。何度作り直しても上手くいかないので、ちには太平洋戦争が始まり、制作は中止せざるを得なくなりました。

困難を極めた全体の
バランス調整

試作を原型にすることをやめ、最初から2層の大ききで作ることにしました。粘土で鏡獅子の持つ迫力を作り、全体のバランスを整える。そして、完成した粘土像から木の彫刻に仕上げました。



鏡獅子完成後、小型の試作原型に基づいて作成されたもの。大きさは国立劇場に展示されているものの4分の1ですが、指先の精巧さや表情のつくりを間近でじっくりと見ることが出来ます。

鏡獅子



鏡獅子試作裸像
1面写真の左側に写っている鏡獅子裸像を展示しています。腕やももの筋肉の張りが見事に表現されていて、今にも動き出しそうな迫力を味わえます。

平櫛田中彫刻美術館で 田中が残した作品を 鑑賞しませんか

田中が残した作品や、暮らした館を公開しています。また、館内ガイドによる作品の解説を定期的に行っています。玉川上水の散策と合わせて立ち寄ってみてはいかがでしょうか。